

佐久間勉艇長 妻の死を悲しむ もう一冊の手帳



佐久間夫婦肖像
(若狭町教育委員会提供)

明治43(1910)年、山口県新湊沖で起こった潜水艇の事故により、13名の艇員とともに殉難した佐久間勉艇長。彼が死の間際、手帳に記した遺書「佐久間艇長遺言」には、艇長の最後まで責任を果たそうとする姿勢や部下の遺族のことを真剣に心配する人間性が現れています。この遺書は全世界に感動を与え、夏目漱石が名文と絶賛し、与謝野晶子が追悼の歌を詠んだことでも知られています。

実には、艇長の家族を思う気持ちなど、その人柄や行動をうかがい知る事ができる手帳がもう一冊あります。「明治四三年懐中日記」といわれるその日記は、艇長の孫、佐久間宏氏が、平成24年夏に生家で見つけたもので、明治40(1907)年から43(1910)年の事が記されています。この懐中日記は艇長の備忘録として書かれ、日記には「出」(手紙を出した人の名前)、「受」(手紙を受けた人の名前)や日々の出来事、時には欄外に体重などが書かれています。

「二月十一日 紀元節 晴、早天、遥拜式ヲ行フ、終テ「ボートレース」嗚呼此二日ハ我レニ於テハ、何タル凶日ナリシゾヤ夜九時三十分當ニ□□ニ就カントスル時「今朝女生レ次子死ス」ノ凶電ニ接ス、実ニ万事夢ノ如シ、アア」

「二月十二日 降雪、晴、寒気強シ、午前四時情深キ艇員ニ送ラレツ呉停車場ヨリ乗車、急ギテ富山ニ向ケ帰途ニツク・・・」

「二月十三日 降雪、午前十時過ぎ富山停車場ニ着ス、・・・急ギテ宅ニ入り長ヘテ眠テ覚メザル次子ノ死顔ニ接シ感慨無量、嗚呼何等ノ悲痛事ゾヤ」

「二月十四日 晴、富山 次子ノ葬式施行、午后二時出棺 市離レノ市役火葬場ニ於テ火葬ニ付ス、可憐二十一才ヲ一期トシテ一朝ノ煙ト消エヌ、嗚呼悲イカナ」



懐中日記(写真中央)

艇長の妻、次子は長女、輝子を出産しましたが、「女の子さんですよ。」との声を聞くと、その後間もなく息を引き取り帰らぬ人となりました。恩師である成田鋼太郎先生への手紙の中でも「隻手、否双手を切断せられたる感あり」と妻の死を伝えていきます。

明治39(1906)年9月に敬慕してやまなかつた母が亡くなり、更に新婚生活一年余りの最愛の妻を亡くすという悲運に見舞われた佐久間艇長。この日記からは、勉の妻への愛と、嘆き悲しみの深さを知らされます。

関連史料・ゆかりの地

佐久間艇長 遺徳顕彰式典



佐久間艇長の出身地である若狭町北前川では、毎年第六潜水艇遭難の日である4月15日に、艇長の墓前、「沈着勇断」の記念碑前広場において、佐久間艇長遺徳顕彰式典が行われています。広場の近くにある佐久間記念交流会館では、佐久間勉にゆかりのある品々を多数展示しています。

参考資料等

佐久間勉「明治四三年懐中日記」
佐久間勉「佐久間艇長遺言」

執筆・協力

若狭町教育委員会事務局 佐久間記念交流会館